

---

# **死神様は僕です**

かなりあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死神様は僕です

### 【NNコード】

N2674M

### 【作者名】

かなりあ

### 【あらすじ】

この公園が僕の未来を変えるなんて僕でさえも予想していなかつた・・・

## 謎の公園

### 第一章 謎の公園

ある日の午後僕はある公園にきた。

まだ誰も言ったことのないといわれるあの公園に・・・

そり、この公園のことを知ったのは学校の帰り道・・・

赤い服を着て、きれい黒い髪をした女人の人と・・・

「このことは誰にも言つてはいけない・・・言つたら全てがなくなってしまう・・・」

このときの僕は何を考えたか、急に女人人が言つてた公園に行きたくなつた・・・

よくよく考えたら、言つたら全てがなくなることをしつてながら僕にいつたんだろう?

疑問がありながらも、その女人の人あとについて行つた・・・

そして、その公園に行つた時には僕はもうこの世にはいない人になつていたことにも気づかなかつた・・・

「あなたはこの公園が見える?」

急に質問をされた。

一瞬とまつどたが確かに見える。

だけどはつきりとじゃない・・・「うすら」としか見えない。

「うすらとなら・・・」

「そう・・・」

この後、長い間沈黙が続いた・・・女人に色々問い合わせてみた  
ものの、

何の返事もない・・・

そして急に女人はとまつた。

「？」

「ここからは一人で行きなさい。」

女の人はその言葉を言ってから消えた・・・

「えっ？ ちよつとまつてつぐだせー！」

ここは公園にきた意味はなんなのかよく分かつてないのに・・・

急に行きなさいといわれても・・・

どうに行けばここのはり・・・

結果的に、

「とにかく歩いひー。」

そうだ、あてもなく歩いてたらどこかにたどり着くだろ？。

でも僕は運がないのかよく分からないうが、

また変な人につながってしまった・・・

「試験合格だ」

「な・・・なんの！？」

次にあつた人は、ショートカットの女人だった・・・

急に、試験合格だつて言われても意味が分からないう・・・

しかもなぜみんな赤い服を着てるんだ？

まゝそれより・・・

「シリジですか？」

「教えられない・・・今教えるのはわたしたちは人間ではないこ

とだけだ・・・

帽子で顔が見えないが、なんとなくは表情が読み取れる。

さつきの人と比べたら結構年を取っているのかな？

「次の試験は、会場で行つ付いて来い・・・」

そしてまた無言の中・・・あるひた、中でおんなおひとりが「うーにっ  
た・・・

「わたしは、そんなにふけて見えるか？」

「なんのひとですか？」

「さつき、話してた時にさつきの人と比べたらとか・・・考えただ  
け」

今までとは違う、女の子らしき声に少し驚いたがそつちよつも・・・

「なんでわかつたんですか？」

「質問に答えろ」

僕の時<sup>には</sup>は誰<sup>が</sup>もわなかつたくせに自分の時<sup>には</sup>は誰<sup>が</sup>も聞<sup>か</sup>えか・・・

なんか、なつとくいかないな・・・

こ<sup>の</sup>は正直に言つたほう<sup>が</sup>いいのかな?

それとも女心を傷つけないよう<sup>が</sup>いよ<sup>う</sup>・・・

しかたないこ<sup>の</sup>は・・・

「お・・・思いました!!」

なんかめつちやくちやでかこ<sup>の</sup>べでいつたけど・・・

どんな反応したかな・・・

そして、上を向いた瞬間!

「そ、う、な、ん、だ、・、・、そ、う、な、ん、だ、・、・、・、」

女の人にはにらみながら

鎌をもちだして僕の横に落とした！

ドスン！

それからこのやり取りを何回したあと女の人は落ち着いたのか。

「それでは行きましょうか」

何事もなかつたかのように歩き始めた・・・

## 試験会場

### 第一章 試験会場

「あの～まだつかないんですか？」

「・・・」

たく・・・あれから何時間歩いたと思つてんだり？

未だにこの試験の内容とか知らないのに・・・

「着いた。」

「！」・・・！」ついで――――」

そつ、田の前にあつたでかい建物は今まで普通に見ていた建物・・・

それどころか、俺が死ぬ前にいたところだ・・・

「それじゃ・・・」

「待つてー。」

「なんだ? 試験のこと以外聞くことさせ違反だぞ

女は、めんどくせんがつぶやいた。

だがそれよりも気になる・・・

「何でここが試験会場なんですか?」

「・・・特別に教えてやる

「ありがとうございます」

「おまえが見ているものは私にも分からない……ただそこに見え  
てる建物があなたの一番思いが

強いところだと思います……」

思ひが強い？俺は……俺はこんなとこで出でなんて……

いじめられ……

罪を擦り付けられ……

あれ？その後が思い出せない……

「……まだか」

「えつ？なんかいいましたか？」

確かになんか言つたよつて聞こえたんだが……気のせいか？

「早く入れ」

「は・・・はい・・・」

氣まずいふいんきの中試験会場で見つけたものは！！

「な・・・・なんだよ・・・・」

そこについたのは、昔僕をいじめていた子たちだつた・・・

「どうした？ なにかみえるのか？」

「ア・・・あそこへ・・・あああそこ・・・」

もう言葉になつてない・・・なにもかもがおかしく見える・・・

左を向いても右を向いても死体ばかり・・・

ドクン・

ドクン・・・

「…なんだ？」

僕はこのとき隣においてあつた包丁をぶんぶん投げていた・・・

ビリビリしたかも分からず・・・

ただ何もなかつたかのよう」・・・

「こんなことするのために俺を連れてきたのか…」・・・

「ち・・・違づく・そんな」・・・

バタンシ・・・

「おい…しつかりしろーおいー

それから僕は、ある夢を見た・・・



## 自分の未来

### 第3章 自分の未来

「なんだ」「？」

真っ白い空間・・・

自分はそこにいた・・・

だが懐かしい氣もする・・・

「なんだこのボタン?」

やつぱりいつもの物を見てしまつと誰でも押したくなのだらう・・・

だがこのときはだけ・・・

なぜか押さなかつた・・・

いや・・・

押せれなかつたんだ・・・

押したらまたへんなことがおこるとおもつたから・・・

押したらまた変な空間に行くかもしないから・・・

「あれ?押さないんだ~」

「ーーー」

「前の君なら押すけど今の君は少し賢くなつたんだね~」

なんだ?前の君?

人間には前世とこののがあると聞いたが……  
そのことなのか?

「押したら?」

「何なんだよ……いきなりあらわれては押すとか賢いだとか……  
!……」

「……バーカ」

小さな顔で言った……

「なんなんだよ……」

「とにかくこの空間から出たいならそのボタン押せ。」

「はあああ~! わたしはバカとか言つてたのになんなんだよ?」

もう意味が分からない……

ただでさえ頭が混乱してるとここのに……

急に現れたやつにいろいろなことにわれなきやいけないんだ?

「つたく……世話をさせんなよ……」

「……」

「・・んな!?

倒れた弾みでボタンを押してしまった・・・

「これで未来の自分とけちやくつけて来い・・・そうしない限りおまえの苦しみは消えない」

予想が当たつたといえばいいのかまた変な空間に出た・・・  
次は真っ暗な部屋だつた・・・

「あら?」客人とは・・・まためずらしいことも・・・」

次は執事的な人だつた・・・

「あの・・・急に質問してねるんですねが、」

「はい・・・」はあなた様の未来のお部屋でござります」

み  
・  
・  
・  
未  
来  
?

「えりですか・・・いろいろあつたのですね・・・」

なんか嬉しいような悲しいような・・・今までの中で分かつてくれた人があまりいなかつたため理解された

ことが嬉しい・・・。

なかなか話もしてくれなかつたからこんなに話ができる気分がすつきりした・・・。

「それでは、」案内いたします」

「えつ？ ど・・・ ど・・・ ど・・・？」

「それは未来の自分とですよ・・・ 自分のお心がすつきつされでいないと扉は開きませんから・・・」

なんだか納得せざるを得ない説明力だ・・・

今まで生きた中でこんなにもしつかりした人は始めて見た・・・

「どうやら入られた後は時間制限がござります・・・」

「どれくらい？」

「約1時間程度でござります・・・」

一時間・・・

そ間にくは何をしなきやいけないのかと考えていた・・・  
けど何も思いつかなかつた・・・  
あこさつはしこう！

「おもしろいですね・・・ 挨拶はとはいことですがね  
クスクス笑いながらも話は続けてくれた。

「後は自分がうまれてから何をしてたなどとかは、はなさないで下さい」

「えつ？」

「次に生まれた時に変な記憶を持つて生まれますといひうの責任になりますんで・・・」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2674m/>

---

死神様は僕です

2010年10月17日12時21分発行